

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391500149		
法人名	株式会社 鋤田電設		
事業所名	グループホームホームさざなみ		
所在地	熊本県天草市有明町赤崎1974番地		
自己評価作成日	令和6年6月1日	評価結果市町村受理日	令和6年9月13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」
所在地	熊本県熊本市中央区水前寺3丁目15-1
訪問調査日	令和6年7月25日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設から14年が経ち、さざなみの理念である「ゆっくり・じっくり・しっかり」と自覚を持ち、職員一人ひとりがケアを行っています。本年度より、年間内部計画(事業計画)に記載していますが、中長期目標や重点目標を目指し、災害の訓練にも力を入れており、新たな行事を追加し活動範囲も拡げています。最近、ドライブへ行く回数が増え、高台から長崎県の島原や雲仙普賢岳、天草の島などを目で見て潮の匂いを感じ、手を繋いで行動するなど五感を取り入れています。施設内から外を眺めれば畑や桜の木があり常日頃見る事が可能であり、窓を開ければ南風が施設内へと軟らかい風が入り込みます。暖かい日は日光浴を浴びながら間食を行ったりしています。また、去年10月に行われた認知症フォーラムの展示会にて優秀賞を受賞し今後も色んな面で積極的に参加したいと思いをしています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者を中心に様々な改革が実行されている。中長期計画・年間事業計画を策定し、年度初めに全職員に配布し周知して計画を実行している。災害時、入居者の命を守るための防災計画を立て、昼夜想定避難訓練・地域と一緒に放水訓練、更に「さざなみ訓練」と称して車で高台に避難する訓練など年間5回の訓練を計画し、火災の他、高潮・土砂崩れなどの自然災害に備えている。毎週日曜日は「ドライブの日」として、入居者の馴染みの場所・実家周辺・桜や紫陽花のお花見・案山子村見物等、気分転換を図り日々楽しく過ごせるように支援している。食事は新鮮な食材を使用し、職員の手作りで家庭的な食事が出されている。毎週金曜日は「お刺身の日」として地元の新鮮な魚を味わい、希望者にはノンアルコールビールも提供されており、生活と食を楽しむ支援を行っている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「ゆっくり・じっくり・しっかり」という理念の言葉を、全職員へ周知している。本年度の事業計画にも記載している。	事業計画書に理念と5つの経営の柱を明記し、年度初めに全職員に配布して職員への周知を図っている。新入職員には新人研修において理念・方針等について説明している。	毎月発行されている広報紙「さざなみ」にも理念を記載して利用者家族に周知すれば、ホームが提供するサービスへの安心感や信頼感も更に高まると思われる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	以前は、グランドゴルフ大会などで同級生や地域の方との交流もあったが、新型コロナウイルス感染などで行事に参加ができなかった。今後地域の方との交流を深めたい。	以前は独居の高齢者をホームに招き、入居者や職員と一緒に食事を摂り交流していたが、コロナ禍以降実施されていない。2024年7月現在、地域におけるコロナ感染者が増加傾向にあるため、地域の人々との交流はまだ難しい状況にある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	在宅介護の講師を務め、また、見守り訓練の総合的な役割を勤めさせて頂いた。伝える機会がありもっと今後も認知症について地域の方へ発信できればと思う。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回、運営推進会議にて取組など報告を行っている。特に、火災(避難訓練など)や風水害の助言を多く頂いている。職員への周知も行い実際訓練で活かしている。	運営推進会議では入居者や職員の状況、行事、クラスター発生から終息までの取組状況等、ホームの情報を積極的に報告している。緊急時の病院受入体制や、地域の消防分署の状況等について情報共有や意見交換が行われている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	現在は連絡を密に取っていないが、分からないことがあれば、市町村へ連絡を行っている。市町村の担当者から依頼などの連絡があれば積極的に参加するなど協力関係は常に行っている。	2024年1月、ホーム内でコロナのクラスターが発生した際は、市の保健センターのアドバイスを受け、必要な物資を調達することができている。必要に応じ市と連携し協力することとしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年4回必ず職員会議にて身体拘束委員会を行っている。身体拘束の実話をもとに周知を行い、身体拘束はしてはいけないと常に強く伝えている。	身体拘束適正化のための指針を整備している。身体拘束適正化委員会を設置するとともに全職員参加の研修会を年4回開催し、事例検討等を行い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議にて学ぶ機会を行っている。職員が虐待を発見した場合の対応なども伝えている。グレーゾーンになったら虐待となる可能性があるため、身体拘束同様虐待は絶対にしてはならないと強く伝えている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年一回だが、職員会議にて内部研修として行っている。セミナーや研修など参加しており、その後、職員会議で職員全員へ分かりやすく周知も行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明を行い、質問・相談・悩みなどあれば傾聴しアドバイスや助言も行っている。契約後もいつでも連絡下さいと常時伝えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月一回、電話での状況報告や病院受診時にお会いする時に、家族様へ意見などお聞きする時もある。意見・要望あれば運営へと繋げている。	入居者の写真や行事の様子等を掲載した広報紙「さざなみ」を月1回発行し、家族へ報告している。また管理者は毎月家族に電話をして利用者の状態を報告し、家族の思いも聞きとり、コミュニケーションを図って家族の安心感を高めるよう取り組んでいる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	提案の内容は薄くても、話を聞いてから職員同士で話し合い、反映へと行っている。	毎月の職員会議では、利用者のケアについて話し合い、受診や家族に関する情報等を共有している。また、行事についての検討や、職員研修等を行っている。管理者は出来るだけ職員が意見や提案を出しやすいような雰囲気配慮し、出された意見は前向きに検討することとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	一人ひとりの状況・スキルを把握し、資格取得のバックアップも行っている。毎年、年二回の個人面談があるが職員の声を聞く機会を設けている。少人数だが、働きやすい環境となる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画に職員研修計画(内部)を実地している機会の確保はできている。外部研修は参加希望者がいれば研修を行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	現在は、同業者と連絡を取り意見交換したりアドバイスなど行っている。実際会う時間など限られるが、今後機会を作って行きたい。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	日頃から、何か要望や困っていることがあれば、傾聴を行い可能な限りその都度対応を行っている。職員から見て気づいたことがあれば、声かけにて対応を行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様へには、いつでも連絡下さいなど何でも話せる関係づくり行っている。継続的に、話せる機会を作り常時対応している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人様と家族様のサービス利用など要望などあれば対応を行う。また、サービスの利用なども視野に入れ対応へと繋げる。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人様が必要とする物などあれば、対応を行っている。暮らしに支障がないようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居者様から職員の名前を覚えてもらうなど、話せる関係を絶やさないようにしている。信頼感も必要と感じる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	同級生や近所の方など面会もあり、久しぶりの再会に笑顔や会話があり、面会者へ「いつでも来てください」とお伝えしている。今後も関係は続けていきたい。	出来るだけ入居者の望みを把握するように努め、馴染みのある場所、行きたい処へドライブで出かけたいとしている。実家周辺を訪問して近所の人と挨拶をかわしたり、懐かしい風景を楽しんでもらうなどして支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で仲がよければ、立腹もあるが、隣に座っている方の洋服を綺麗に伸ばしたり、咳をされたら背中をさすったり、水を下さいなど代わりに貰いに行く動きもあり、入居者同士での支え合いとなる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	連絡があれば、助言など行っていきたい。契約が終了しても、関係性は続けていきたいが、現在、契約が終了したら連絡は取っていない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人様の気持ち(希望など)があれば可能な限り傾聴し、職員間でも常に共有を行っている。本人様が納得されるよう対応を行っている。	日頃は寡黙でも職員と1対1になることで思いやのぞみを出しやすくなる入居者には、入浴介助時など「ゆっくり・じっくり・しっかり」対応し、意向の把握に努め、本人本位の支援となるよう心掛けている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に情報など職員へ周知を行い、過去の生活歴や病状などを把握している。分らない時は家族様へ確認の電話を行う。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	申し送りノート・情報共有などから情報を確認し、出勤時は、必ず職員同士で共有を行っている。急変などの緊急を要する場合は情報を発信する。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人様からの意見や、ご家族様との話し合いなどを傾聴し、可能な限り目標に向けて介護計画を作成している。	入居者がホームで生き生きと暮らせるように、本人にとっての楽しみを把握し、ケアプランに落とし込むよう努めている。プランに沿ったサービスが提供できるよう、プランの内容を職員間で共有し支援している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	実践や気づきなどは、常に個別記録へ記入している。変化があれば情報を発信している(スマホにて)共有することによって職員が動きやすくなる。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	否定はせず、まず傾聴行い本人様や家族様からお話があればニーズに応える。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事等は少なくなっているが、参加の依頼や声をかけて頂いたら職員も一緒になって参加し地域の方との繋がりを大切にしたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	何かあれば、かかりつけ医へ連絡し対応を行っている。分からないことは積極的に聞きしている。かかりつけ医の先生からもアドバイスを助言など頂いている。	定期的な受診は家族同行を基本としている。必要に応じて皮膚科・眼科等の専門医への受診は職員が同行し家族へ報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、職場には看護職はいないが、日常で何かあった場合は、職員の判断で対応または様子を見ている。かかりつけの病院で分からないことがあれば看護職の方へ相談や質問を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院になった場合は、面会や病院関係者へ情報(経過など)確認しお聞きしている。退院日が分かれば生活できるように対応を行っている。病院関係者と常に連帯を取っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状況を確認し重度化になった場合は、家族様へ連絡を行う。今後の方針を含め家族様の意見と私達の意見も伝え、本人様に対して一番い場所(病院)をお伝えする。また、病院からのアドバイスや助言を伝える。	看護師の配置はなく、看取りケアは行っていないことを利用契約時に本人・家族に説明し、納得を得ての入居としている。医療的ケアが必要となった際は、家族やかかりつけ医等と相談の上、病院や対応可能な施設等への搬送等で支援するとしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年2回の避難訓練(放水訓練)実施。 本年度より、新行事で車を使用し目的地まで行くなどの車上訓練を予定している。 避難訓練後、施設内で消防職員と地域の方と一緒にAEDの講習などを行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	職員会議で、施設周辺には何があるかなど把握するように職員へ伝えている。訓練に力を入れている。また、地域の方との協力も得ている。	火災避難訓練・自然災害を想定した車での避難、夜間想定避難訓練や、地域の防災訓練への参加など、入居者の命を守るため年間5回の訓練を行っている。職員は日頃から防火水槽・消火栓の場所など確認し、消防署や地域住民とも協力して災害へ備えている。	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室に入る時は、ノックをする。トイレの使用中はドアを閉めるなどプライバシーの確保に努める。言葉については職員会議で常時伝えている。言葉については、言葉にクッションを入れる様に職員伝えている。	「プライバシー保護研修」を実施して職員の意識向上を図るとしている。不適切な言葉遣いが見受けられた場合は、都度、指導が行われているが、十分ではないように伺えた。	言葉遣いチェックリスト等を活用し、定期的に点検するなど、改善への工夫を期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人様の意思を傾聴し、小さなことでも希望に沿った対応を行っている。本人様が決定が出来ができ可能な限り対応を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員のペースで動かさず、本人様第一で対応を行っている。理念どうり「ゆっくり」でも大丈夫ですよと声かけを行う。職員のペースで入居者様を動かさないよう職員へ伝えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類、整髪など、こだわりがある人やない人も、少しでもお洒落ができる環境に努めている。母の日や誕生日にはお洒落な物をプレゼントしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	今日は何が食べたいですか？と、食べたい物を聞いたり、食べる楽しみの一つであり、畑で野菜を収穫し調理に使用するなど、食事の下準備も一緒に行っている。お皿を洗ったり、食卓も拭いてもらっている。	法人内の畑で収穫された野菜や、海の幸など新鮮な食材を使った職員手作りの家庭的な食事が提供されている。毎週金曜日はお刺身が出され、希望者にはノンアルコールビールも出されている。入居者と職員が同じテーブルを囲み、おしゃべりしながら食事を摂る楽しい時間となっている。お雛様・七夕・誕生日・敬老会等、季節感を大切に行事食にも配慮し食事を楽しむ支援を行っている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに応じた食事・水分・排泄・バイタルなどの状況を把握できるよう個別記録の見直しを行い、A3用紙1枚で大きく一週間分を分かりやすく作成した。今後も改善予定である。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	現在、入居者全員、自ら口腔ケアをされる。就寝前に、義歯ケースへ入れるなど動作も問題なく出来る。残歯の治療や、義歯の調整などは協力医へ連絡し往診となる。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	九名全員、日中は失禁もなく自分の足で歩いてトイレへ行かれる。動作は問題ないが、一部介助(ズボンの上げ下げ)や、排泄後流さないなどあるが、声かけを行うと流すことができる。	現在、入居者はパット・リハビリパンツ・布パンツ等を使用しているが、オムツ介助が必要な利用者はいない。快適な排泄が継続できるよう、タイムリーな声掛けや誘導で支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個別記録や本人様から、排便が出ないなど訴えがあれば、状況に応じお薬を服用して頂く。また、オリゴ糖を入れるなど少しでも排便が出るようにと対応を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時は健康状態バイタルなど確認し問題なければ入浴を行っている。 入浴の希望者がいれば入浴を行っているが、入りたくない意思表示があれば見送ることになる。本人様の気持ちを優先する。	週3回の入浴を基本とし、本人の気分や体調を見ながら入浴支援をしている。ヒノキの、やや大きめの浴槽にゆったりと浸かれるよう補助器具等を設置して、安心・安全を確保して支援を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人様が居室で休みたい時は、休んで頂く。就寝前にエアコンで温度管理など行っている。夜間、排泄後は必ず水分補給の声かけを行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の仕分けや、日付の記入は職員が行っている。食後や就寝後の服薬の時にミスがないように確認し服薬介助を行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	朝のスタートは、洗濯物・キッチンマットのたたみが日課となり残存機能を活用し数名だが包丁を持って柿の皮むきなども行っている。今後も色んなことに取り組む予定である。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	5類になり、少しずつドライブなど活動範囲を拡げている。入居者様の地元へドライブに行ったり、行きたい場所へとドライブを行っている。以前は本人様の気持ちを優先し熊本市まで行ったこともある。「行ってよかった」と話された。	毎週日曜日は外出の日としてドライブに出かけることにしている。桜や紫陽花等季節の花見や案山子村へ見物へ行ったり、実家周辺に出かけ近所の方に挨拶したり、出来るだけ戸外に出かけ、五感を刺激し気分転換が図れるよう支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	訪問販売やヤクルトの販売など、本人様が体調が良ければ、自らお金を払う。お金大切さは再び感じ自由に使えるように行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	年賀状に一言書いて頂き家族へ送っている。電話で話したい時はいつでも対応を行っている。最近では、数名だが携帯電話を所持されており家族との連絡をされている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	環境整備も整え、現在、フロア内には貼り絵を作成し季節感を出している。一人ひとりの居室にも心地よく過ごして頂くため、思い出の写真や作品なども飾っている。	オープンスペースのリビングにはダイニングを挟んでソファークーナー・畳コーナーがあり、入居者は時間帯に応じてそれぞれのお気に入りの場所で食事をしたり、テレビを見たり、おしゃべりしたり、ゆったりとすごしている。5月は鯉のぼりを屋内に飾り、お花見や紫陽花などのちぎり絵作品も掲示するなど、季節感にも配慮している。居心地よく過ごせる穏やかな雰囲気共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人の時間もゆっくりと過ごして頂いている。また、ソファに座る席や食事の席などは好きなように座ってもらっている。現在、気が合う人同士で座っており、会話や笑顔があり助け合う動きもある。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族様から思い出の写真を持参されることもある。居室には普段から使用していた使い慣れたものを継続的に使用されている。	各居室には洗面台・作り付け収納庫・整理ダンスが設置されている。入居時に馴染みの物等、自由に持ち込めることを伝えているが、衣類や身の回りの品物、生活用品等は収納庫に納められており、全体的にすっきりした雰囲気の居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	日付・時間・季節など分かるように取り入れている。一人ひとりが自立した生活を送れるように今後も工夫を取り入れる。		